

魅力満載!! 三江線

江の川沿いの風情



《20》

「万葉集」第一の歌人といわれ、歌聖とも称される宮廷歌人、柿本人麻呂。しかし、これだけ有名な歴史上の人物でありながら、出生をはじめその生涯は謎に包まれている。

中でも、私が一番関心を持ったのは、人麻呂と依羅娘子（よさみのおとめ）との恋の物語だ。

「石見のや 高角山の木の際より 我が振る袖を 妹見つらむか」

その人麻呂が、七〇五年（慶雲二）年から七〇九年までの約四年間、国の役人として赴任していたといわれているのがここ石見の国だ。その足跡を物語るように石見各地には、人麻呂ゆかりの地や伝説が数多く残されている。

「中では恵良媛（えらひめ）と呼ばれる依羅娘子だが、二人は江の川が日本海に注ぐ現在の江津市で出会い、恋が芽生え、

「木の際より 我が振る袖を 妹見つらむか」

人麻呂の立場上、長くは一緒にいられないことを承知の上で、ともに過ごす時間はかけがえのないものであったことだろう。

その思いの深さと切なる



人麻呂と依羅娘子

切ない別れ 歌碑と像に

ろうか)

この歌は、高角山の山頂から依羅娘子の住む郷を眺めて歌ったものとい

付近にある人丸神社の前

われているが、この山頂には、この歌が刻まれた歌碑と、別れの場面を思わせる二人の銅像が向き合っている。

銅像は、江津市在住の彫刻家、田中俊晴さんによるものだが、人麻呂と依羅娘子が互いを想（おも）う慈しみと悲しみ、さらにはまた会えると思ひ合う二人の希望が時を超えて伝わってくる。

また、江の川流域の千金地区に一九三三（昭和八）年まであったという渡し場は、人丸渡しと呼ばれ、人麻呂が都へ戻る時にも渡ったと伝わる。

千三百年前、石見と京の都は、今では想像もつかないほど、はるか遠くの地だった。柿本人麻呂は、どんな思いでこの江の川を渡っていったことだろうか。



高角山公園に向かい合って立つ、柿本人麻呂と依羅娘子の銅像

(NPO法人「結まいるプラス」・かわべまゆみ、江津市桜江町在住)

隔週土曜日掲載